



未来の
『私に影響を与えた1冊』

木戸 征彦

4月、春。新しい旅立ちの季節だ。

日曜日、東京でも桜の名所として名高い「千鳥が淵」へ行ってきた。天気も良く桜も満開で、絶好の花見日和。

昨年は震災の影響で自粛ムードが拡がり、花見客も少なかったらしいが、今年はその反動なのか例年にも増して人出が多く、あちこちの桜の名所が大賑わいだったらしい。帰り際、ふと日本武道館への入り口を見ると『××大学入学式会場』なる看板が立っていた。花見客に加え、入学式に出るための親子連れなども混じり、一層混雑に拍車がかかったのだろう、地下鉄「九段下」駅の出入り口は入場規制までされていた。

地方からきた新入生などは無事入学式に出席できたのだろうか、他人事ながら心配になった。

数十年前、ぼくも同じように、故郷を後にして東京に出てきた人間の一人だからだ。

東京近郊に住んでいる人たちには分からないだろうが、ぼくら地方の人間にとっては、東京の大学に合格し、上京する時には格別な思いがある。

それまでと全く違った未知の世界の始まりに、夢と希望で胸が一杯になる。逆にずっと一緒だった家族と離れ、一人きりの生活に対する不安も芽生える。何とか夢を叶えようと努力するが、現実はその簡単ではない。東京での華やかな生活に溺れ、夢を抱いて上京したことさえ忘れがちになる。

結局、夢も希望も叶わずに、ただ漫然と東京に残り、ごく普通の生活、或いは故郷にいた時より荒んだ生活に身を委ねていく。

毎年この時期になると、上京してきた日のことを懐かしく思い出す。

山手線の高田馬場駅ホームで「これからは一人、東京で生きていくのだ」と意気込みながら見た桜の樹のことを。

『私に影響を与えた1冊』は、それこそ数え切れないほどある。

人生の節目節目で、悩んだ時、迷った時、それらの本は、ぼくが目指すべき生き方の指針を示してくれた。それが正しかったかどうかは別にしても。

一方、つい最近、未来の『私に影響を与えた1冊』になるだろう本に巡り会った。

それが吉田修一「日曜日たち」だ。

この本は、ぼくと同じように、地方から単身東京へやってきた若者たちの様々な思いを描いた短編集である。

テーマは「忘れたいほど哀しいこともあるが、けして忘れてはいけない大切なものもある」とでもいうべきか。切なく、ほろ苦い回想を交えた話だが、必ず子どもの兄弟二人が全編に顔を覗かせる。

最終話の、タイトルでもある「日曜日たち」では、東京に出てきた女性“乃里子”が恋にも破れ、故郷へ帰る時の歯がゆく切ない思いを描いている。

故郷へ戻る日。数年前、ふとしたことで出会ったその兄弟と再会する。

当時「自立支援センター」でボランティアをしていた乃里子は、両親から見捨てられ、センターに連れられてきた二人と出会った。翌日には警察に引き渡される。兄は、警察に行けば弟と離れ離れになることを知って、秘かに弟を連れ抜け出そうと試みる。その場に出くわした乃里子は、大人の自分でさえ満足に暮らしていけない東京で、小さな子ども二人が生きていけるわけがないと、懸命に押し止め、お守り代わりに自分のピアスを一つつ二人に渡した。

数年後、故郷へ戻る決心をした乃里子は、引越し当日に、鳶として東京で独り立ちした兄と四国から修学旅行で東京へ来て会っていた弟に偶然再会するのだ。

二人は離れ離れになっていたが、でも懸命に生きていた。しかも乃里子に気づいた兄は、耳に付けたピアスを照れくさそうに彼女に見せる。今の自分たちがあるのは、彼女がくれたピアスのおかげだとも言いたそうに。

その仕草を見て、故郷へ戻らざるを得ない後悔と無念さが消え、彼女が思う最後の文章。

“嫌なことばかりだったわけではないと乃里子は思う。そう、嫌なことばかりだったわけではないと。”

この最後の一文がこのうえなく心に響いた。

殊に東京に来ながら“夢破れて”故郷へ帰ることになるであろうぼくにとっては。

最近、東京に来たことを後悔しかけていた『私に影響を与えた1冊』だ。

ぼくもいつの日か、故郷へ帰ることになる。上京した時の夢や希望はすでに消え失せた。思いも何一つ果たせなかった。でもその日が来た時、「嫌なことばかりだったわけではない」と思えば、東京での生活も捨てたものじゃなかったという気持ちで帰れそうな気がする。

そう、東京での暮らしは「嫌なことばかりだったわけではない」と、思えば。

4月、春。新しい旅立ちの季節だ。

日曜日、東京でも桜の名所として名高い「千鳥が淵」へ行ってきた。天気も良く桜も満開で、絶好の花見日和。

昨年は震災の影響で自粛ムードが拡がり、花見客も少なかったらしいが、今年はその反動なのか例年にも増して人出が多く、あちこちの桜の名所が大賑わいだったらしい。帰り際、ふと日本武道館への入り口を見ると『××大学入学式会場』なる看板が立っていた。花見客に加え、入学式に出るための親子連れなども混じり、一層混雑に拍車がかかったのだろう、地下鉄「九段下」駅の出入り口は入場規制までされていた。

地方からきた新入生などは無事入学式に出席できたのだろうか、他人事ながら心配になった。

数十年前、ぼくも同じように、故郷を後にして東京に出てきた人間の一人だからだ。

東京近郊に住んでいる人たちには分からないだろうが、ぼくら地方の人間にとっては、東京の大学に合格し、上京する時には格別な思いがある。

それまでと全く違った未知の世界の始まりに、夢と希望で胸が一杯になる。逆にずっと一緒だった家族と離れ、一人きりの生活に対する不安も芽生える。何とか夢を叶えようと努力するが、現実はその簡単ではない。東京での華やかな生活に溺れ、夢を抱いて上京したことさえ忘れがちになる。

結局、夢も希望も叶わずに、ただ漫然と東京に残り、ごく普通の生活、或いは故郷にいた時より荒んだ生活に身を委ねていく。

毎年この時期になると、上京してきた日のことを懐かしく思い出す。

山手線の高田馬場駅ホームで「これからは一人、東京で生きていくのだ」と意気込みながら見た桜の樹のことを。

『私に影響を与えた1冊』は、それこそ数え切れないほどある。

人生の節目節目で、悩んだ時、迷った時、それらの本は、ぼくが目指すべき生き方の指針を示してくれた。それが正しかったかどうかは別にしても。

一方、つい最近、未来の『私に影響を与えた1冊』になるだろう本に巡り会った。

それが吉田修一「日曜日たち」だ。

この本は、ぼくと同じように、地方から単身東京へやってきた若者たちの様々な思いを描いた短編集である。

テーマは「忘れたいほど哀しいこともあるが、けして忘れてはいけない大切なものもある」とでもいうべきか。切なく、ほろ苦い回想を交えた話だが、必ず子どもの兄弟二人が全編に顔を覗かせる。

最終話の、タイトルでもある「日曜日たち」では、東京に出てきた女性“乃里子”が恋にも破れ、故郷へ帰る時の歯がゆく切ない思いを描いている。

故郷へ戻る日。数年前、ふとしたことで出会ったその兄弟と再会する。

当時「自立支援センター」でボランティアをしていた乃里子は、両親から見捨てられ、センターに連れられてきた二人と出会った。翌日には警察に引き渡される。兄は、警察に行けば弟と離れ離れになることを知って、秘かに弟を連れ抜け出そうと試みる。その場に出くわした乃里子は、大人の自分でさえ満足に暮らしていけない東京で、小さな子ども二人が生きていけるわけがないと、懸命に押し止め、お守り代わりに自分のピアスを一ずつ二人に渡した。

数年後、故郷へ戻る決心をした乃里子は、引越し当日に、鳶として東京で独り立ちした兄と四国から修学旅行で東京へ来て会っていた弟に偶然再会するのだ。

二人は離れ離れになっていたが、でも懸命に生きていた。しかも乃里子に気づいた兄は、耳に付けたピアスを照れくさそうに彼女に見せる。今の自分たちがあるのは、彼女がくれたピアスのおかげだとでも言いたそうに。

その仕草を見て、故郷へ戻らざるを得ない後悔と無念さが消え、彼女が思う最後の文章。

“嫌なことばかりだったわけではないと乃里子は思う。そう、嫌なことばかりだったわけではないと。”

この最後の一文がこのうえなく心に響いた。

殊に東京に来ながら“夢破れて”故郷へ帰ることになるであろうぼくにとっては。

最近、東京に来たことを後悔しかけていた『私に影響を与えた1冊』だ。

ぼくもいつの日か、故郷へ帰ることになる。上京した時の夢や希望はすでに消え失せた。思いも何一つ果たせなかった。でもその日が来た時、「嫌なことばかりだったわけではない」と思えば、東京での生活も捨てたものじゃなかったという気持ちで帰れそうな気がする。

そう、東京での暮らしは「嫌なことばかりだったわけではない」と、思えば。